

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年5月26日(火)

### 《自分に厳しく、相手には寛大に！》

今日の福音(ヨハネ 17・1 11a)は、弟子達と別れる前にイエス様が御父に祈っている内容です。

いつか私も、自分の人生はもう残り少ないと感じることがあると思います。それは誰も例外ではないでしょう。そしてその時に、イエス様や御父に、「いろいろ難しいこともありましたが、あなたが私にくださった召命を頑張ってきました。間違いや失敗もありましたが、できるだけあなたの御旨に従おうとしました。」という告白ができれば、その人は本当に幸せな人だと思います。しかし、臨終の近い人と接する時が多い私を感じるのは、「ほとんどの人は、いつか迎える死についてあまり考えていない」ということです。死には時があります。子どもの時に死ぬことも、事故によって死ぬことも、そして長寿したと言われる位まで生きて死ぬこともあります。その「時」は、誰にも分かりません。しかし、信者である私たち達は、死を見る目や心、そして生き方を見る目をいつも意識しなければなりません。それによって全然違う自分の姿が現れるからです。しかし、私たちには、そういうことを忘れようとする傾きがあります。なぜならば、それを考えるのはあまり嬉しくないし、悲しく、虚しくなるからです。そして恐れもあります。しかし、今日のイエス様のように「あなたが私を遣わされた目的を成し遂げました。」という告白ができるような人生ならば、いろいろ難しいことがあったとしても、本当に幸せな人生だったのではないかと、やりがいばかりの人生だったのではないかと思います。

私もこのような告白がいつかできるように、毎日を準備しなければならないと思います。

そして、今日の第一朗読(使徒言行録 20・17 27)は、使徒パウロの話でした。彼の話をよく聞いてみますと、彼にもいろいろな失敗や間違い、弱さがありましたが、「私はあなたの御旨だけをいつも考えながら生きてきました。」という告白がいつでも可能な人でした。私たちもパウロのように、いろいろな弱さを持ってはいます。それでも御旨を考えて生きることができる、という自信を持ってよいのではないかと思います。

そして、今日の第一朗読と福音を読んで、私が感じたもう一つのことです。人間の弱さの一つは、自分にはものすごく寛大なのに、相手にはものすごく厳しいということです。このような心の動きをほとんどの人が持っています。ですから、自分の間違いや失敗は、自分を楽にするためにすぐ赦してしまいます。そして忘れます。しかし、相手の間違いは、頭から離れません。そしてその人が嫌いになります。なぜそのようなことをするのか、と裁こうとする傾向が私たちの中にあるのではないかと思います。善い生き方をした聖人達と私たちとの違いは、大体聖人達は、自分には厳しく相手には寛大な心を持っていた、ということです。

皆様、私たちも相手には寛大になりましょう。そして、自分に対しては信仰が基準になる厳しさが必要ではないかと思います。こういうことが上手く出来れば、批判することより、自分を反省する気持ちの方が先になると思います。そして相手の間違いを見たら、「相手にとって成熟する一つの過程だろう。失敗したがいつか成功するだろう。」と一緒に心配する気持ちを持つことが、私たちには必要ではないかと思います。私ならばすぐできるのに、なぜそんな簡単なことを失敗してしまうのか、と言ってしまうのでは、結局、自分のためにもよくない結果を出します。

皆様、人生のいろいろな出会いの中で、相手を見る目が厳しすぎるのではないかと反省をしてみましましょう。そして、自分には寛大すぎていつも赦してしまうところがあるのではないかと考えてみましょう。そういう反省する心だけでも、自分の心の変化を体験できると思います。

ありがとうございました。